

タチヤナ・レズニコワ「ロシア人と日本人の非言語的  
行為と結びついた慣用句の解釈におけるギャップ」

堀 内 賢 志

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）  
第18巻第2号（2020年3月）抜刷

## 【翻訳】

タチヤナ・レズニコワ「ロシア人と日本人の非言語的  
行為と結びついた慣用句の解釈におけるギャップ」

堀内賢志

説明的な言語単位である慣用句は、私たちにとって非常に興味深いものである。それによって私たちは非言語的な行為の意味内容をよりよく理解することができ、非言語的な行為の根本にある文化の概念的カテゴリーを把握することもできる。そうした慣用句の肉体的原型、ジェスチャー（本稿では「ジェスチャー」という語を、学問的な用語として、表情なども含めた広い意味で使う）に由来する原型を強調するために、ここではその転移された意味（辞書に載っているのはそれだけに限定されていることが普通である）だけでなく、本来の意味をも引用する。特に重要なのは、表情による意味伝達と結びついた慣用句の要素である。感情のニュアンスは言葉で表現することが難しいため、表情と結びついた慣用句は、感情の標識として非常に興味深い。というのも、日本人がロシア人に対して表情の動きとその意味を教えることは困難であり、これを直接的に記述するためには時間と撮影機器のような特別な設備が必要となるからである。

さまざまな文化における感情表現の普遍性<sup>1</sup>の問題に対しては、ラディカルな普遍性（P・エクマン）から絶対的な特殊性（R. L. バードウィステル）まで、様々な視点が存在する。この問題については、極端な視点は受け入れがたい。というのも、一方では、全ての人類に特有の共通した感情表現があり、他方では、文化的コードが（時には人種的な肉体的相違も）影響を及ぼしてそれぞれの特殊性の基礎を形成しているからである。

ロシア人と日本人の感情の表れの類似と相違は、多くの慣用句において現れている。例えば、「心」、「気」、「胸」、さらにまた「虫」、「肝・胆」、「腹」、「腸」といった語彙素の入った慣用句である。類似の例をごく一部だけ引用しよう。日本語の「心にかかる」とロシア語の「心の近くに受け入れる」（「強く気にかかる」の意）、日本語の「気が重い」とロシア語の「心に重い」（「押しつぶされた」、「陰鬱な」の意）、日本語

1 C. イザードの10の基本的感情（関心、喜び、驚き、悲しみ・苦痛、怒り、不快感、軽蔑、恐怖、羞恥心、罪悪感）による。

の「胸が躍る」とロシア語の「喜びで心が揺れる／躍る」、日本語の「肝に染みる、肝に銘ずる」とロシア語の「肝臓までしみとおる」（「心に強く刻まれる」の意）<sup>2</sup>、日本語の「胸が潰れる」とロシア語の「(何か) 胸を圧する」（「胸がふさがる」の意）。また、相違の例（ロシア語には類似した意味の慣用句が無いもの）もいくつか挙げておく。日本語の「虫が怒る」、「肝を煎る」、「肝が潰れる」、「胆が据わる」、「腹を立てる」、「腹が据わる」などである。

非言語的な行為の要素を原型とする慣用句、すなわちジェスチャー由来の慣用句も少なくない。これらも感情表現の類似と相違を特徴づけている。

さらに、主として慣用句的な素材や、私たちが日本人たちに対して行ったインタビューから得られたデータ、文学作品からの例に基づいて、非言語的な行為の要素、すなわち表情の動き、視線、ポーズ、足取り、記号的身振りなどについて、やや詳しく検討しよう。

例えば、日本人の非言語的な行為に関するロシア人の印象を伝えるものとして、20世紀前半に活躍したロシア人作家ピリニャークが日本を訪れた際のことを描いた、次のような一節がある。「敦賀の人たちの顔は、何も表現していない。それは、自分が感じていることを隠すという日本人の礼儀作法のルールにしたがったものであり、あらゆる手段において、目つきさえもそうである。」「彼女と一緒に車両に乗っていた日本人たちが、男性も女性も、裸の体を恥ずかしがることもなく、寝る前に服を脱ぎ始めた時、まわりのすべては恐ろしく、不可解であった。」「その人は彼女をとて怒らせた。彼は低い声を出し、頭を下げながら、お辞儀の状態で両手を膝に当て、そして名刺を渡した後、手は出さなかった。彼女は、彼が日本の習慣に従って挨拶をしたことを知らず、親戚の腕に飛び込もうとしていた。彼は手さえ差し出さなかった」<sup>3</sup>。

外国人にとって日本人同士の表情を読み取ることは困難であるため、日本人が控えめな、口を閉じた、「出来合いの」微笑みを見せることは、しばしば不愉快な印象を呼び起こし、不誠実であるように感じられる。他方、ロシア人の恒常的なコミュニケーション要素として、礼儀にかなった「社会的な」微笑み<sup>4</sup>が欠けていることは、日本人には当惑を呼び起こすことが多い。ロシア人がめったに笑わないことは、日本のロシア旅行案内の中でも指摘されている。さらにそれが、直接相手の目を見るという、日本人の特徴には無い行為と結びつくと、不愉快な、威嚇的でさえあるような印象を

2 次のB・パステルナークの詩の一節と比較せよ。「あたかもアンチモニーのなかで／ぬれそぼった鉄のように／ぼくのこころのなかに／きみが 鮮やかに刻みつけられた」（稲田定雄訳『パステルナーク詩集』角川書店、1972年、134頁）。

3 B. A. ピリニャーク「物語がいかに創られるかということに関する物語」（B. A. ピリニャーク『全生涯：散文集』ミンスク：「芸術文学」社、1988年、460～470頁）。

4 もちろん、日本人がこのようにしか笑わないということではない。日本語には笑いを表す多くの描写の仕方がある。「明るい微笑み」、「あざ笑い」、「かすかな微笑み」、「さもおかしそうに笑う」、「愛想笑い」、「笑いがこぼれる」などである。

タチヤナ・レズニコワ「ロシア人と日本人の非言語的行為と結びついた慣用句の解釈におけるギャップ」

呼び起こす。そうした表情に対する日本人の緊張したりアクションを考慮しなければならない。

ロシア在住の日本人へのインタビューの際、相手の目を見ることの意味<sup>5</sup>を議論していた時、私たちは次のような指摘を受けた。「黙って、笑いもせず、ましてや怒って相手の目を見ることは、日本人にとっては、脅かすこと、威嚇することを意味する。そのように振る舞うのは街のならず者だ。ロシア人たちはよくそのようにしており（じっと目を見る）、例えばレジの女性はいつもそのような表情と目つきをする。外国人たちに目を見られた場合には、日本人はそれを普通に受け取る。しかし、もし日本人にそのように見られたら、それはあまり良くは受け取られない。相手の目を見ることは、日本人にとって関係を壊すことを意味する。就職の面接の時や試験の時などには、顎のあたりやネクタイを見る。日本文化の伝統では、相手の目を直接見ることは失礼であり、それは家の中や親しい友達の間だけで許される。『目上・目下』の関係においては許されない。他人同士の間には、あたかも壁があるようだ。もしこれがヤクザだったらすぐに喧嘩になるだろう」。次のような側面も興味深い。日本文学では、「私の目をじっと見つめた」という言い方が、ロシア文学であれば明らかに現れないような場面でよく見られる。というのも、ロシアではそうした行為は何か重要なものとして意識されることは無いのである。逆に、記号論的なコードとしての「見ない」<sup>6</sup>という行動も、（沈黙という行為との類推で）コミュニケーション上、重要なものでありうる。

非言語的行為の文化的規範として、感情を表に出すことを自制することは、日本人一般が激しい感情表現と無縁だということを意味するわけではない。日本人が深い感銘と無縁であるわけではないからなおさらである。文学作品からいくつかの例を引こう。「森は、躍起となつて、板の間をたたきながら…」<sup>7</sup>、「彼の述懐を聞くと、先づ早水藤左衛門は、両手にこしらへてゐた拳骨を、二三度膝の上でこすりながら、『彼奴等は皆、揃ひも揃つた人畜生ばかりですな』」<sup>8</sup>、「相手は、顔をしかめながら、忌々しさうに、柳の根へ唾を吐いた」<sup>9</sup>。そうした文学上の怒りの描写は、ロシア文学にもよく見られる。とはいえ、日常生活において感情を発散する、つまり「色を出す」（顔に表現する、他人に見せる）ということは、日本人においては許容しがたいことと考えられている。「殊に、今でも眼についてゐるのは、副長の慌て方で、この前の

5 T. B. レズニコワ『日本のジェスチャー辞典』（モスクワ：「東方書籍」社、2014年）66頁の「睨む」の項目も参照のこと。

6 例えば、侍の英雄的行為の記述において、「斬った...そして振り返らなかつた」という表現が繰り返し見られる。例えば次の文献を参照。M. V. ウスペンスキー『東方の首都の侍：忠臣たちの歴史、一勇斎国芳と1840年代の日本の版画』カリーニングラード：「ヤンタルヌィ・スカス」社、1997年。

7 『芥川龍之介全集 第一巻』岩波書店、1977年、169頁。なお、旧漢字は新漢字に修正した（以下同様）。

8 『芥川龍之介全集 第二巻』岩波書店、1977年、11頁。

9 『芥川龍之介全集 第一巻』岩波書店、1977年、366頁。

10 話題となっているのは船内での小さな盗みについてであり、副長は自殺していたかもしれない盗みを働いた信号兵のことを気に病んでいた。

戦争の時には、随分、驍名を馳せた人ださうですが、その顔色を変へて、心配した事と云つたら、はた眼にも笑止な位です<sup>10</sup>。私たちは皆、それを見ては、互に軽蔑の眼を交してゐました。ふだん精神修養の何のと云ふ癖に、あの狼狽のしかたはどうだと云ふ、腹があつたのです<sup>11</sup>。自分をコントロールできない人間は、倫理的にというだけでなく、美的にも、受け付けられないという印象を呼び起こす。しかも、どんな感情によってその人の顔色が変わったのかは、事実上重要ではないのである。

外国人の表情の豊かさが日本人に当惑を呼び起こすのは、驚くべきことではない。「西洋へ来て以来、何度も先生の視聴を動かした、西洋人の衝動的な感情の表白が、今更のやうに、日本人たり、武士道の信者たる先生を、驚かしたのである。その時の怪訝と同情とを一つにしたやうな心もちも、未だに忘れやうとしても、忘れる事が出来ない…」<sup>12</sup>。現代においてモスクワに住んだ若い同時代の日本人の印象は、20世紀初めに芥川が書いたこととおおよそ似ているようだ。日本人留学生たちは、ロシア人があまりにも激しく身振り手振りをし、両手を打ち合わせたり振り回したり拳を打ちつけたりすることを指摘する。私たちのインタビューの際、回答者が次のようにコメントしたのは典型的である。「私がロシアの女性教員に折り紙をプレゼントしたところ、彼女は大げさに両手を広げた。日本の女性（日本の男性ではなく！）がこのようにするのは極めてまれであり、例えば高価なプレゼントを受け取った時などには見られるが、基本的にはこうしたジェスチャーはテレビでしか見ない」。「女性教員は、『私が買う！』という言葉とともに、こぶしで『自分の胸をたたく』ジェスチャーをして、展示会でカタログを自分で買う意向を示した。日本の男性はこのジェスチャーをする時にこぶしでたたくことがあるが、しかし一回だけである。女性はそうしたジェスチャーをすることはありえず、そういった状況では、両手を組んで揺り動かすか、胸に手を押し付ける」。その他、ロシア人たちの行為において何が目に付くかという質問に対する答えとして回答者たちは、頻繁な握手や、さらにロシア人一般、特に女性の声の大きさを指摘した。微笑みが無く、また発言の内容が理解できない時にはなおさら、大きな声は日本人にとって脅迫と受け取られる。日本とロシアでは女性についての理想が本質的に異なっている。日本人女性の理想は「静かで目立たない」ことである（私たちの研究におけるインタビューで日本人たちが見せた特徴である）。これに対し、ロシア人女性の理想は、「疾走する馬を止め、燃える家に飛び込む」（これは19世紀半ばのロシア詩人 N. A. ネクラソフの詩の一節であり、ロシアでは広く知られている）というものであり（しばらく前のアンケート調査によれば、ロシア女性として理想とされたのは、大柄で、その役において激しい感情を表現した、女優ノンナ・モルジュコワであった）、そのコントラストは明らかである。ロシア人はむしろ、日本社

11 第一巻、『芥川龍之介全集 第一巻』岩波書店、1977年、229頁。

12 同上書、250～251頁。

タチヤナ・レズニコワ「ロシア人と日本人の非言語的行為と結びついた慣用句の解釈におけるギャップ」

会の日常生活において感情表現がかなりの程度ルールに縛られていることに苛立つのである。

特徴的なのは、「睨む」という、日本人はあまりしない威嚇するような表情のジェスチャーが、基本的には日本人が「面子を失う」ことを強いられた状況と結びついているということである。例えば、回答者たちはこの表情のジェスチャーの使用について、次のような形でコメントした。「何か不愉快なことを言われた時、逃げ場のない状態に置かれた時、罵られた時、馬鹿にされた時」。日本人は面子を失わないよう自分で努力し、他人にそれをさせることもない。それと関連して興味深いのは、日本の若い女性がロシアの「顔を手で覆う」というジェスチャーを示された時の指摘である。「日本では、誰かが弱ってしまったり失敗を我慢したりする時（筆者注：「面子を失う」と同様）、それを見ている人はそうしたジェスチャーを使う場合がある」。また別の回答者は、「そっぽを向く」（交渉を拒否する）というジェスチャーを使う場合として、次のような状況を引用した。つまり、相手が恥ずかしさを感じている時に相手を見ないようにするために、もしくは相手の方がこちらを見ないようにするために、そっぽを向くのだという。日本語には顔／体面の維持と喪失に結びついた多くの慣用句がある。「顔／面目／面子を立てる」、「面目／面子を保つ」、「顔が潰れる」、「面目を失う／面子をつぶす」、「顔が汚れる、面汚しになる」などである。日本ではいつも、「面子を失う」時を先延ばしにするために、あらゆる可能なことがなされる。このため、時には外国人は不愉快な状況に置かれる。例えば、はじめて日本に滞在した若いロシア人に日本人の行動に関して指摘したいことについて聞いてみると、次のように答えた。「商店で買いたい商品を訪ねると、店員はそれが無いということを決してすぐには言わず、様々な店員を倉庫や他の売り場などに行かせて、その後に決まりの悪そうな様子で長々と謝罪をする。しかし、どうやら彼らはそれが無いということを最初から知っているようなのだ」。個人的な経験（2012年）からの例を引こう。パソコン売り場の店員は、私が外国人であり次の日には帰国するということを知りながら、付属品や教育用プログラムの必要性についての質問、国外パスポートに従った領収書の作成に少なからぬ時間を費やし、ようやくその後、彼が推奨したパソコンのモデルを価格に見合ったものにするための新しいプログラムを、非居住者はその店でインストールすることができないことを、悲しげな様子で伝えたのである。どうやら彼は、私が銀行に行く途中で戸外の40度の大気の中に溶けてしまうか、購入手続きの時に断念してくれて、プログラムのインストールができないことを彼が認めないで済むよう、すなわち「面子を失う」ことがないように、望んでいたようである。

「面子を保つ」という行動規範を順守するため、日本の文化において非常に重要となるのは、上述したように、相手の目を直接に見ず、同時に、パートナーの感情の状態のもっとも微妙なニュアンスを感じとる能力である。

回答者の一人が指摘したように、日本人は、「視線が及ぼす現実的な力を自覚して



いる」。視線の魔術的な力に関する表象は、古代の時期においてはあらゆる文化にとって特徴的なものであった。それでもやはり日本文化においては、特殊な「視覚（じつと見つめること）の神話的要素」がみられるのであり、それは日本文化の形態を形成する基盤と考えることができる<sup>13</sup>。いくつかの日本の慣用句で、この神話的要素を反映したものを指摘しよう。「強い目をしている」、「目に力を込める」、「見合う」、「瞳を凝らす」、「目を注ぐ」、などである。文学作品からの例として次のようなものがある。「市兵衛は、かう云ひながら、視線で彼の顔を『撫で廻した』<sup>14</sup>。「僕の両手には長いあいだ凝視された痕跡が残っている」<sup>15</sup>。

日本語には、まさに「視線」という概念を表すために使われる語彙素や語結合（目付き、目色、眼差し、など）が非常に多く、また、個々の感情的・精神的な状態を記述するために使われるものも非常に多い。ロシア語と類似したものも多くみられる。日本語の「鋭い目」、「射抜く目」、「冷たい目」、「敵意ある目」、「深長な目」、「疑いの目」、「訴えかけるような目」、「恋する目」、「目を背ける」、「目を伏せる」などと同じ表現がロシア語にもある。日本語の「目は口」と同様の「しゃべる目」という表現もある。他方で相違したものもある。例えば、「目がいい／目が悪い」という時、ロシア語では、「親切な／敵意に満ちた目」という意味が込められるが、日本語では単に「良い／悪い視力」を意味するか、あるいは「洞察力のある／ない人」という意味もある。日本語の「目の黒いうちに」という慣用句は、「生きているうちに」という意味であるが、ロシア語では「黒い目」という表現は、「邪視ができる目」、つまり人に害悪をもたらすことのできる目という、否定的なニュアンスも持っている（おそらく、古い魔法などを行う、黒い目をしたジプシーからきている）。

慣用句には、眼孔の形（日本人の眼瞼裂には少し持ち上がった眼角がある）や上まぶたの構造（日本人はやや垂れ下がった蒙古ひだを持っている）に関係したロシア人と日本人の身体的な相違も観察される。「大目玉を食らう／食う」という慣用句がある。ロシアの「大きな目で見る」、「目をみはる」という慣用句は「驚き」のみを意味するが、日本人が「大きく目を開く」ことは、「驚く」ことを意味することもあれば（「目を皿にする」、「目を丸くする」）、「怒る」ことを意味することもある（「目を見張る」は感心したり驚く時だけでなく、怒る時にも使われる）。「目の色を変える」は、「目を大きく開き、興奮、不安、驚き、悔しさ、憤慨などで表情が変わること」と解

13 例えば L. M. エルマコワの研究を参照のこと (L. M. エルマコワ「古代日本文学の目、視線、視覚」L. M. エルマコワ『一輪の花の庭：論文・随筆集』モスクワ：ナウカ社、1991年、212～223頁)。そこでは、「見」は、「国見」（秩序と安寧の維持を目的とした「国の見回り、監視」）、「丘見」（丘の見回り）、「月見」、「花見」（花見という慣習の起源は天然痘の精に抗するまじないの儀式であり、「桜の花を愛でる」というのは、より後の時代の、平安時代の仏教的な世界観をより反映したものである）といった行事における影響の形式と見られており、視線の創造的な力に関して結論が下されている。

14 『芥川龍之介全集 第二巻』岩波書店、1977年、58頁。

15 村上春樹『ねじまき鳥クロニクル：第3部 鳥刺し男編』新潮社、1995年、265頁。

16 白石大二編『国語慣用句大辞典』東京堂出版、1977年、445頁、451頁。

タチヤナ・レズニコワ「ロシア人と日本人の非言語的行為と結びついた慣用句の解釈におけるギャップ」

積される<sup>16</sup>。また、日本人にとって、目を細めることは、「目を細める」、「目もなく笑う」というように、喜びや和解と結びついている。これに対しロシアでは、「優しく目を細める」という言い方もあれば、「威嚇的に目を細める」という言い方もある。アジアの人々の上まぶたの形は、「目の鞆の抜けた人」、「目の鞆が外れる」（まぶたが目を覆い隠していない人）という慣用句の中に反映されている。これは、よくものが見えており、何も見落とすことなく、すばやく行動する人を意味する。

「目」という語彙素を含み、「怒り」を意味する次のような日本の慣用句も、ロシア人には分かりにくい。「目／眼に角を立てて睨む」、「目を逆立てる」、「目を三角にする」、「目が吊り上がる」、「目尻を上げる」（「目じりを下げる」は、視線を和らげること、また女性に見とれること）。歌舞伎の舞台では、表情による感情表現は、「隈取り」という特別なメーキャップによって様式化され<sup>17</sup>、強調されるが、目や眉の先端の外部を持ち上げることも同様に怒りを表現し、口角を下げることは尊大さや皮肉を込めた薄笑いを表し、威嚇は両方の瞳を眉間に向けて寄せることで伝えられる。ちなみに、私たちのアンケートで回答者たちは、似たような絵を「睨む」というジェスチャーへの解説に付していた。また、人が怒っていることを表す顔文字の中には、「\ /」や「▽▽」がある。

私たちのインタビューで、回答者たちは次のような指摘をした。「話をする時、ジェスチャーを使うと理解は容易になるが、話し相手の目の方を向いて（筆者注：「目を見て」ではない）話をしたほうがいい。『目は口ほどにものを言う』という諺が意味しているのは、目つきというよりは、目の動きである」。こうした特色は、日本人が目を見ることが伝統的に避けてきたことと同時に、話し相手に対して最も注意を集中していることを示すよう求められるということと関係している。指摘しておきたいのは、「目端が利く」という慣用句が意味するのは「分別力がある、すべてのことに気がつく、如才ない」ということであるが、「目を見上げる」という慣用句は「見るために目を上げる、直接に前方を見る」と解釈されるということである<sup>18</sup>。伝統的に日本人は、会話の際、視線の方向を話し相手の目の高さより低くするからである。

眼の動作と関連した慣用句のほか、「顔」、「眉」、「鼻」という語彙素を含む慣用句も興味深い。

顔（顔・顔つき・顔色）の表現を表す慣用句の中には、ロシアのものと非常に類似したものがある。例えば、「顔をしかめる」とロシア語の「顔にしわを寄せて不機嫌でいる」、「浮かぬ顔」や「沈んだ顔つき」とロシア語の「水の中に下ろされたように憂鬱げだ」、「物の哀れも知り顔を作る」<sup>19</sup> とロシア語の「思慮深い顔つきをする」、「苦笑い」とロシア語の「苦い笑み、無理をした笑み」などである。同時に、日本語

17 芝居版画、能面、文楽の人形芝居と比較せよ。

18 『国語慣用句大辞典』451頁。

19 『国語慣用句大辞典』462頁。



の「苦い顔」は、意味上はロシア語の「酸っぱい顔、酸っぱい様子」と合致し、一方で日本語の「渋い顔」という表現に類似したものは、ロシアには全く見当たらない。「渋い」という形容詞は、そもそも非言語的な行為の特性という観点から興味深い。「渋い声」は、低く魅力的な声のことだが、また落ち着いた安心感のある声、さらに不満・不快を示す声という意味もある<sup>20</sup>。「渋い」はまた、目立たない優雅さとして特徴づけることのできる、特別な日本的様式の識別の特徴でもある。「彼はとても『渋かった』…。彼の着物、彼の下駄はとても渋みのある簡素さがあり、彼の手には麦わら帽子が握られており、彼の手は美しかった」<sup>21</sup>

日本語にかなり多く見られる慣用句として、「眉」の入った表情のジェスチャーと関連したものがある。伝統的な文楽の人形芝居の人形には、眉を動かすための装置があり、それは、感情を伝えるために顔のこの部分が重要だということを示している。これらの慣用句の中には、日本語の「眉一つ動かさない」とロシア語の「眉さえ少し動かすこともしない」（何かに気づいたり感じたりする様子を見せない）、日本語の「眉をひそめる」とロシア語の「眉を寄せて険しい表情をする」（何かに対して是認しない）のようにロシアと日本で共通のものもあれば、日本の「眉唾」<sup>22</sup>、「眉を吊り上げる」、「愁眉を開く」のようにロシア人にはわかりにくいものもある。

「頬」および「顎」という語彙素を伴った多くの日本のジェスチャー由来の慣用句もロシアでは異なった解釈をもたらす。日本語では「頬／頬ぺたをふくらす」は「腹を立てる」、「すねる」を意味するが、ロシア語で「頬をふくらます」は「威張る」を意味する。一方、ロシアでも日本でも、「腹を立てる」、「嫌な気分である」を意味する「顔をふくらす」という表現、また「ふくれづら」という表現がある。日本語では「顎が落ちそう」は「非常に美味しい」を意味するが、ロシア語でこれにあたる表現は「指をなめる」、「舌を飲み込む」である。ロシア語の「顎が垂れ下がる」は「驚き」を意味する。日本語で「顎を出す」は「力尽きる」、「意気阻喪する」を意味する

20 『国語慣用句大辞典』213頁。

21 ビリニャーク、前掲書、460頁。「渋い」という言葉について筆者は次の論文の中で詳しく論じた。T. B. レズニコワ「ボリス・ビリニャークの作品における日本語の形容詞「渋い」『ロシアの文化空間：第18回学術・実務大会論文集（2017年4月20日、モスクワ）』モスクワ：MAKS Press, 2018年、75～77頁。

22 興味深いことに、中国語の「眉」という漢字自体に「へつらう」という意味もある（次の文献を参照。A. A. プルツキフ『女性をキーとした漢字の構造・意味分析』博士候補学位論文要旨、モスクワ、7頁）。日本の漢和辞典には「眉」の項にこの意味は見られないが、日本語では、中国語と同様、「お世辞、こび」という意味を持つ「媚」という漢字がある。「女」と「眉」という要素から出来ており、中国語では「美しい、魅力的な」という意味もある。それに関連して、プルツキフは次のように考えている。「お世辞を言ったりおもねったりする時、重要な役割を果たすのは人の顔の表情である。特に、眉のように表現豊かで活発に動き、美しい眉を持った女性は、常に魅力的である」（前掲書、15頁）。日本の古典文学における美人の記述では、常に眉が目される。例えば、観阿弥の芝居「卒塔婆小町」では、次のような内容が出てくる。「かつて小町であった女性は、いたるところで自分の美しさをたたえられ、花のような魅力で見る者をうっとりさせていた。彼女の眉は三日月のように反っていた…。白粉をした顔は優雅に輝いていた」（『謡曲：日本の古典的な芝居』モスクワ：ナウカ、1970年、195頁）。また、「眉の蝶は遠い山々の神秘的な美しさで魅することはすでない」（196頁）ともある。辞書の「眉唾」の項目に「お世辞」の意味が伴っていることを参照せよ。

タチヤナ・レズニコワ「ロシア人と日本人の非言語的行為と結びついた慣用句の解釈におけるギャップ」

が、ロシア語で「顎を突き出す」は「強情を張る」を意味する。その他、「笑って顎をはずす」（ロシア語の「倒れるまで（へとへとになるまで）笑う」と比較せよ）、「頬が緩む」、「頬をゆがめる」（現実と矛盾することについての表情。ロシア語で不満・軽蔑を示す「顔をゆがめる」と比較せよ）などである。

日本語には「鼻」という語彙素を伴う慣用句が少なくない。そこでは「鼻」は、少なからず「人」のシンボルとなっている。例えば、暴露すること、誰かを出し抜くことを意味する「鼻をあかす」や、「強い、本気の、危険な敵対者」を意味する「鼻がこわい」、「鼻が強い」、「鼻のこわい相手」などである。ロシア語のジェスチャー由来の慣用句と類似した例としては、不満や不機嫌を表すジェスチャーである「鼻をしかめる」、沈思黙考や厳かさを表すジェスチャーである「鼻の先をこする」などがある。ただし、ロシア語で「誰かに対して鼻をぬぐう」は、「自分の優越性を示す」ことを意味する。異なった意味になる例としては、誠意や敬意を示して高く掲げることの意味する「鼻に当てる」、うぬぼれることや自慢することの意味する「鼻にかける」、誇っている、やや自慢している、勝ち誇っていることを意味する「鼻／小鼻をうごめかす」、見下すように、軽蔑的に、しかるべき敬意を持たず対応することを意味する「鼻であしらう／鼻の先であしらう」、女性に対してちやほやすことを意味する「鼻の下を伸ばす／長くする」などがある。

「口」、「唇」、「舌」という語彙素を含むロシアのジェスチャー由来の慣用句と類似したものは、日本語にも非常に多く見られる。驚きや失望で口を広く開けることを意味する「ああと口を開ける」、ずうずうしく、厚かましく言うことを意味する「口幅ったいことを言う」、嘲笑すること、嘲ること、非難することを意味する「唇を翻す／反す」、不満の表明を意味する「唇をとがらす」、悔しさを抑えていることを意味する「唇をかむ」などである。また、ロシア語には無いものもある。傲慢な言い方をすることを意味する「大きな／でかい口をたたく」、強く驚くことや自身の非を認めることを意味する「舌を巻く」、東京の方言でしゃべること、つまり速く、また「R」をより明瞭に発音することを意味する「巻き舌でしゃべる」、などである。

さらにまた興味深いのは、しばしば行動の様式としての動作を示す、歩きぶり、態度、姿勢と結びついた慣用句である。ロシアの慣用句に近いものもある。尊大な様子で歩くことを意味する「肩をそびやかして歩く」、謙遜していることを意味する「体を縮める」、自身を窮屈に、みじめに感じていることを意味する「体／肩身をすぼめる」などである。また、ロシア語には無いものもある。自信たっぷりの様子で歩くことを意味する「肩で風を切る」、傲慢にふるまうことや他人を威圧することを意味する「肩を怒らす」、傲岸不遜さ、大柄さ、ずうずうしさを示すことを意味する「大あぐらをかき」、また「内股で歩く」、「抜き足」、さらに、堂々と／きまり悪く感じていることを意味する「肩身が広い／狭い」などである。

さらに、日本人とのコミュニケーションの際に動作学上の特別な関心を引き起こす

重要な要因としてあるのは、伝統的な日本文化の生活様式の特異性である。日本とロシアのように文化的に遠い関係の下では、ロシア人にとって日本の文化的な事物とその使用の仕方を理解することが難しいという問題が生じる。例えば、扉は、日本では障子という左右に開く仕切りであり、テーブルは非常に低い。日本の部屋の床は、稲藁でできた畳で覆われており、伝統的にコミュニケーション空間の重要な一部となっている。それは、日常生活や芸術<sup>23</sup>など全てのレベルで現れる。日本の住居の空間的構造や日用品、食器、民族的な衣服や靴といったものの特異性は、間違いなく身のこなしや歩き方の特性（例えば着物を着た女性の動きはヨーロッパの衣服を着た女性の動きとは異なる）、またジェスチャーの独自性（畳の上に座ってお辞儀する、など）を決定づけており、日本人の非言語的な行為とそれと結びついた慣用句に刻印を残している。それは、民俗学的ギャップとして分類可能な、ジェスチャー解釈上のギャップおよびそれと結びついた言語学的なギャップが生じることにつながる。例えば、「袖」という語彙素を伴う日本のジェスチャー由来の慣用句のうち、ロシアのそれと類似したものは数少ない。そうした類似したものは、袖の裁ち方が特別な意味を持たないようなものである。例えば、引き留める、注意を引くという意味の「袖を引く」や、赦しを請うことを意味する「袖にすがる」、などである。しかし、日本の着物の袖は特別な意味を持っている（下の方に非常に広く、「ポケット」を持つ）。このため、ロシア人には理解しにくい慣用句が非常に多い。賄賂を意味する「袖の下」、無駄な努力をすること、存在しないものを表現することを意味する「無い袖を振る」、無視すること、冷たくあしらうこと、また俗語で結婚を断ることを意味する「袖にする」、「袖になす」、悲しみや涙を見せないことを表す「袖を顔に当てる」、遠慮を表す「(袖で) 口を覆う」(ヘッドスカーフの端で口を覆うという昔のロシア女性のジェスチャーと比較せよ)、恥ずかしさから両手で着物の長い袖を巻く動作を意味する「(袖を) 縄に縋う」、さめざめと泣くことを意味する「袖を絞る」、そこから「涙が流れる」ということを意味する「押さえる袖の下から」<sup>24</sup>、無関心に眺めていることを意味する「袖手傍観する」(ロシア語で何もせず怠惰であることを意味する「ズボンに手を入れて立っている」と比較せよ)。次のような恐怖のジェスチャーが描かれた文学作品の例は、着物の広く長い袖があってこそ可能となる。「…弟子は、師匠の容子を一目見ることが早い、思はず両袖に頭を隠しながら、自分にも何と云ったかわからないやうな悲鳴をあげて、その儘部屋の隅の遣戸の裾へ、居すくまつてしまひました」<sup>25</sup>。

伝統的な日本の衣服とアクセサリの特異性は、ロシア人には理解しにくい他のジェ

23 例えば日本の映画監督である小津安二郎について、研究者たちは、通常より非常に低い位置にあり、カットの中で人の有意義性を拡大し強めている、その特殊なカメラアングル（畳に座っている人の位置から撮っているような）を指摘している。

24 「私の袖は涙に濡れている」という詩的イメージは広く見られる。

25 『芥川龍之介全集 第二巻』岩波書店、1977年、205頁

タチヤナ・レズニコワ「ロシア人と日本人の非言語的行為と結びついた慣用句の解釈におけるギャップ」

スチャー由来の慣用句とも結びついている。何もせず遊び暮らす生活を意味する「左うちわ」、着物の裾の端を少し持ち上げるといふ表現から、芸者になることを意味する「襟を取る」、着物の端をまくり上げそれを帯に挟むといふ表現から、何かを短縮する、簡素化する、例えば会話を切り上げることなどを意味する「尻を端折る」、何かを行う準備が完全にできていること、決心がついていることを意味する「禪を締める」、知らないといふふりをすることを意味する「頬被り」などである。また、「ナツメグは上等なハンカチをそっと広げるみたいに微笑んだ」<sup>26</sup> という比喩は、非常に美しい日本のハンカチを見たことのない者には理解するのは困難である。

その他の伝統的な生活様式の特殊性と結びついた、いくつかの慣用句のギャップを挙げてみよう。「尻餅をつく」や、誠意も無く頭を下げることを意味する「唐臼が上下する」、ありえないことが起こることを意味する「立ち臼も二階へ登る」(臼のように鈍重な人も二階へ上がるということを寓意的に示している)、長居する、どっかり腰を落ち着けることを意味する「神輿をすえる」、闘いの用意ができていることを意味する「鉢巻きをする」、客がいない時に芸者が茶臼を取り出して仕事の時間楽しくおしゃべりをしたことから、自由時間の隠喩となった「お茶を挽く」。また、真似ることを意味する「二の舞」や、誰かの誤り・失敗を繰り返すことを意味する「二の舞を踏む」は、舞楽から来ている表現である<sup>27</sup>。

こうしたギャップの中から、ジェスチャーおよびジェスチャー由来の慣用句のテーマ別グループを抜き出すことができる。例えば「侍に関するグループ」である。これは、武器やその他の侍の生活の属性と結びついており、侍の倫理と美学を反映している。刀を持った者同士の闘いを表し、争いを意味する「ちゃんばら」、解雇することを意味する「首を切る」(手のへりで首を横から切るやり方は、侍の自殺の方法からきている)、「兜を脱ぐ」(このジェスチャーは、弓を射る時、神への祈りの時、感謝を表現する時、天皇の前で天皇の命令を読む時、貴族がいる時、戦場で降伏を表明する時などに行われ、罪を認めることの隠喩である)、激しく戦うこと、相手に屈しないことを意味する「しのぎを削る」(「しのぎ」は刀の高くなった筋の部分)などである。また、不自由なく快適に暮らすことを意味する「左うちわ」(このジェスチャーの意味は、「武器を持つべき左の手に団扇をもって扇ぐ」という形で明確になる)や、最後まで全力を出す準備があることを意味する<sup>28</sup>「もろ肌脱ぐ」<sup>29</sup>も、ここ分類することができる。後者は、ヤクザにとっては脅しを意味する。それはヤクザが入れ墨を見

26 村上春樹『ねじまき鳥クロニクル：第3部鳥刺し男編』新潮社、1995年、122頁。

27 『国語慣用句大辞典』318頁。

28 「武士の決闘のルールに従い、英雄は両手の動きの自由を確保しながら胴と肩をはだける。それは相手との闘いの準備の合図となる。その後、歌舞伎では、肩をはだけるジェスチャーは着物の上着の袖だけを脱ぐようになり、その下には鮮やかな下着もしくは豪華な鎧が隠されている」(E. A. セルジュエーク『17～19世紀の日本の芝居版画』モスクワ：イスクリストヴォ社、1990年、60頁)。

29 『国語慣用句大辞典』358頁、473頁。

せて自分のステイタスを示すことと関係している。

また、以下のような「相撲に関するグループ」を抜き出すこともできる。相撲の取り組みの勝者が懸賞を受け取る際の感謝の表現である「手刀」、元気を失った人が見るのも不快だと感じるところを意味する「苦手」(相撲で、打撃を受けて一息つく状態にもない相手をこのように呼んだことから来た表現だと考えられる)<sup>30</sup>、風采が立派であること、堂々としていることを意味する「押し出しがいい」、相手も無く自分だけいきおいこむこと、相手との差が大きくて勝負にならないことを意味する「独り相撲」、相撲で両力士が両方の手でお互いのまわしをつかむ時のやり方を表し、対等に戦うこと、面と向かって立つこと、公然と対立することを意味する「四つに組む」。

宗教的なテーマを持った慣用句でロシア人には理解しにくいものとして、以下のものがある。借金をする時には天使のような顔であり、返す時は悪魔のような顔であることを意味する「借りる時の地藏顔、返す時の閻魔顔」、口を広く開けて笑うことを意味する「鰐口をあけて笑う」(「鰐口」とは神道の神社や仏教の寺院の前にかかっている銅鑼)などである。

動植物の世界と結びついた次のようなギャップもある。「虎視」、魚を探す鶴や鳥を探す鷹のような鋭い目を意味する「鶴の目鷹の目」、太陽の光をよけるひさしのように足を額に当てるたちとの比較で、疑いを示すジェスチャーとしてある「たちの目陰」などである。ロシア人には理解しにくいジェスチャー由来の慣用句には、日本人にとって最も重要な、海での漁と結びついた次のようなものもある。こっくりこっくりと居眠りをする、あちこちの方向に揺れることを意味する「船を漕ぐ」、じっと身動きしない、堅苦しくしていることを意味する「竿を飲みすくむ」(ロシア語で背筋をぴんと張っていることを意味する「アルシン尺を飲み込んだように」と比較せよ)。自然現象に基づいた、顔や微笑みの表現の特性も独特である。「綿谷ノボルは微笑みをうっすらと口許に浮かべた。今度のは明け方の空に浮かんだ三日月のような、薄く冷たい微笑みだった」<sup>31</sup>。「彼女の顔は、まるで干あがった池の底みたいに、表情というものを欠いていた」<sup>32</sup>。「口元には例の感じのいい微笑みが戻っていた。それは波の具合によって隠れたり現われたりする海辺の洞窟みたいに、ごく自然に現れたり引っ込んだりするようだった」<sup>33</sup>。

イディオムの受容に関する研究やその他の諸研究に立脚すれば<sup>34</sup>、こうしたジェスチャーとジェスチャー由来のイディオムの組み合わせを利用することは、外国語学習

30 『国語慣用句大辞典』315頁。

31 村上春樹『ねじまき鳥クロニクル：第2部 予言する鳥編』新潮社、1994年、56頁。

32 同上書、240頁。

33 村上春樹『ねじまき鳥クロニクル：第3部鳥刺し男編』新潮社、1995年、60頁。

34 例えば、V. P. ジンチェンコ『心理教育学：講義のための素材 第1部 生きた知識』サマラ：サマラ印刷所、1998年、197頁。Gibbs R.W., Nayak N. & Cutting C. "How to kick the bucket and not decompose: Analyzability and idiom processing," *Journal of Memory and Language*, Vol.28, 1989, pp.576-593.

タチヤナ・レズニコワ「ロシア人と日本人の非言語的行為と結びついた慣用句の解釈におけるギャップ」

に効果的だと考えられる。というのも、それによって様々な種類の記憶（視覚的記憶、聴覚的記憶、形象的な記憶、「体の記憶」）を呼び起こすことができるからである。

訳者注：本稿は、タチヤナ・レズニコワ『日本のジェスチャー辞典』（モスクワ：「東方書籍」社、2016年）（Словарь языка японских жестов / Т. Б. Резникова. - М.: Издательство ВКН, 2016）の第2部第4章第2節を、著者による加筆・修正を経た上で、翻訳したものである。